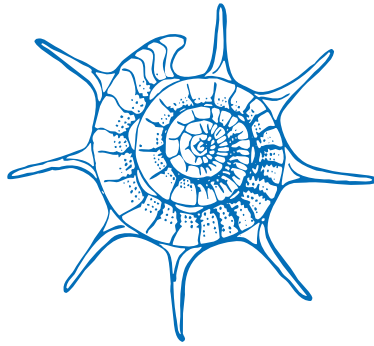


**平成 27 年度**  
**日本貝類学会大会プログラム**

**The 2015 Annual Meeting of  
the Malacological Society of Japan  
Program**



**平成 27 年 5 月 23 日 (土) ~ 24 日 (日)**

**May 23-24, 2015**

**会 場: 北海道蘭越町山村開発センター**

**Rankoshi Convention Center, Hokkaido**

**日本貝類学会**

**The Malacological Society of Japn**

## 口頭発表 タイトル

(5月23日(土)~24日(日) 北海道蘭越町 山村開発センター)

● 5月23日(土) 10:00~ 受付開始

口頭発表 <座長：狩野泰則> 11:15-12:15

- 11:15-11:30 O-01 日本産アオガイ類(カサガイ目：ユキノカサガイ科)の系統と分類学的再評価  
照屋清之介<sup>○</sup>(東大・理・地球惑星科学)・中野智之(京大・瀬戸臨海実験所)・  
佐々木猛智(東大・総合研究博物館)
- 11:30-11:45 O-02 ツタノハガイとオオツタノハ：種分類と生態情報の現状  
佐々木猛智<sup>○</sup>(東京大学総合研究博物館)・忍澤成視(市原市教育委員会)・  
西田 梢(産業技術総合研究所)・中野智之(京都大学瀬戸臨海実験所)
- 11:45-12:00 O-03 ミトコンドリア COI 遺伝子と形態形質に基づくコガモガイ類の分類学的研究  
中山 凌<sup>○</sup>(京大・理学研究科)・中野智之(京大・瀬戸臨海実験所)
- 12:00-12:15 O-04 北海道周辺海域のカミオニシキ亜属の再検討  
栞原康裕<sup>○</sup>(道総研網走水産試験場)

【 昼 食 1 2 : 1 5 - 1 3 : 3 0 】

口頭発表 <座長：佐々木猛智> 13:30-14:45

- 13:30-13:45 O-05 棘皮動物寄生性分類群ハナゴウナ科における生態および形態の進化史  
高野剛史<sup>○</sup>(東京大学大気海洋研究所)・Anders Waren(スウェーデン国立自  
然史博物館)・狩野泰則(東京大学大気海洋研究所)
- 13:45-14:00 O-06 河川性アマオブネ類多様性の中心はどこか?：インド西太平洋における生物地理パターン  
福森啓晶<sup>○</sup>・狩野泰則(東大・大気海洋研)
- 14:00-14:15 O-07 分子遺伝マーカーによるクロタマキビ *Littorina sitkana* の隠蔽種  
東 典子<sup>○</sup>(北大院水)・山崎友資(蘭越町貝の館)・千葉 晋(東京農大)
- 14:15-14:30 O-08 時空間スケールにおけるクロタマキビ貝殻形態に見られる表現型可塑性と急速な進化  
山崎友資<sup>○</sup>(蘭越町貝の館)・五嶋聖治(北大院水)
- 14:30-14:45 O-09 北海道十勝地方におけるコシダカヒメモノアラガイの分布および分子系統学的特徴  
尾針由真<sup>○</sup>(帯広畜産院畜産学研究科畜産生命科学専攻野生動物学研究室・岩手大学農学部共同獣医  
学科獣医寄生虫学研究室・岐阜大学大学院連合獣医学研究科獣医学専攻病態連合講座)・押田龍夫(帯  
広畜産大学大学院畜産学研究科畜産生命科学専攻野生動物学研究室)

【 休 憩 1 4 : 4 5 - 1 5 : 0 0 】

口頭発表 <座長：黒住耐二> 15:00-16:00

- 15:00-15:15 O-10 実験飼育下で判明したカラスガイとドブガイモドキの幼生の宿主魚類  
伊藤寿茂<sup>○</sup>(新江ノ島水族館), 柿野 亘・上杉翔太(北里大学), 北野 忠・河  
野裕美(東海大学)・藤本治彦(八重山高等学校)
- 15:15-15:30 O-11 礼文島・利尻島におけるカワシンジュガイ類の分布について  
栗倉輝彦<sup>○</sup>(札幌市)・佐藤雅彦(利尻町立博物館)・宮本誠一郎(レブンクル写  
真事務所 & レブンクル自然館)・村上賢治(礼文島自然情報センター)
- 15:30-15:45 O-12 埼玉県の農業水路における外来種トンガリササノハガイ *Lanceolaria grayana* の分布と生息環境  
三浦一輝<sup>○</sup>(北海道大学地球環境)・藤岡正博(筑波大学生命環)
- 15:45-16:00 O-13 北海道余市湾沿岸における 2014 年秋のアオイガイの漂着記録

鈴木明彦<sup>○</sup>(北海道教育大学札幌校)・圓谷昂史(北海道博物館)

16:00-17:00 ポスターコアタイム(奇数番号)

**□頭発表 <座長: 三浦一輝> 17:00-18:00**

- 17:00-17:15 O-14 ヤマトシジミ *Corbicula japonica* の形質に地理的変異はあるだろうかー生花苗  
沼産ヤマトシジミの生態  
園田 武<sup>○</sup>・小俣貴広・栗原慶也・佐藤宏明(東京農業大学生物産業学部水産  
増殖学研究室)
- 17:15-17:30 O-15 マシジミ *Corbicula leana* は“外来種”か?  
黒住耐二<sup>○</sup>(千葉中央博)
- 17:30-17:45 O-16 トウガタカワニナ科貝類の両側回遊  
日高裕華・狩野泰則<sup>○</sup>(東京大・大気海洋研究所)
- 17:45-18:00 O-17 19世紀後半に琵琶湖の水生生物を収集したフランス人ステナケルの足跡をパリ国  
立自然史博物館に辿る  
中井克樹<sup>○</sup>(滋賀県立琵琶湖博物館)・滝川祐子(香川大学・農)

**【懇親会 蘭越町民センター 18:30-20:30】**

● 5月24日(日) 07:45～ 受付開始

**□頭発表 <座長: 中井克樹> 08:30-9:30**

- 08:30-08:45 O-18 形成4年目の潮間帯への貝類の進出状況  
上村哲平<sup>○</sup>・大越健嗣(東邦大院・理)
- 08:45-09:00 O-19 地震・津波によるサキグロタマツメタの貝殻への影響とその後  
鈴木聖宏<sup>○</sup>・大越健嗣(東邦大院・理)
- 09:00-09:15 O-20 3.11地震・津波から4年一回復する沿岸域の貝類群集に対する人為的影響  
大越健嗣<sup>○</sup>(東邦大院・理)・清水沙姫・雲出沙南(東邦大・理)
- 09:15-09:30 O-21 死サンゴ構造体への貝類蝸集とその長期的遷移  
久保弘文<sup>○</sup>(沖縄県水産海洋技術センター)・謝名堂 聡(沖縄県自然保護・緑化推進課)

09:30-10:30 ポスターコアタイム(偶数番号)

**【 総 会 10:30 - 11:30 】**

**【昼食または「蘭越町貝の館」ツアー 11:30-13:00】**

13:00-14:00 公開講演会「漁業の優等生、ホタテガイーその生態から資源管理まで」 五嶋聖治(北大院水)

**□頭発表 <座長: 栗原康裕> 14:00-15:00**

- 14:00-14:15 O-22 日本北方海域(樺太、千島列島、北方領土、オホーツク海、北海道)の貝類概況と  
地名・人名に因む種名  
知野光雄<sup>○</sup>(川崎市)・樋口滋雄(仙台市)・山崎友資(蘭越町貝の館)
- 14:15-14:30 O-23 国後島および択捉島で確認された貝類 調査と標本の持ち帰り手続きについて  
野別貴博<sup>○</sup>(公益財団法人知床財団)・山崎友資(蘭越町貝の館)
- 14:30-14:45 O-24 北海道産エゾマイマイの飼育下における生活史 産卵から成熟まで  
山口敏孝<sup>○</sup>(北海道文教大学明清高等学校)
- 14:45-15:00 O-25 北海道東部で見られる裸殻翼足目の1種における形態学的特徴と捕食行動  
桑原尚司<sup>○</sup>(北海道立オホーツク流氷科学センター)・伊藤公一(城崎マリノウ  
ールド)・山崎友資(蘭越町貝の館)

## ポスター発表 タイトル

(コアタイム・奇数番号：23日 16:00-17:00、偶数番号：24日 09:30-10:30)

- P-01 北海道のマメシジミ類  
家山博史<sup>○</sup>(愛媛県)
- P-02 リシケタイラギによるツメタガイ幼生の摂食  
鈴木健吾<sup>○</sup>(水研セ・北水研)・伏屋玲子(水研セ・水工研)・前野幸男(水研セ・西水研)
- P-03 淀川のヌートリアによるイシガイ科貝類の捕食事例、および死殻から推定されるその特徴  
石田 惣<sup>○</sup>(大阪市立自然史博物館・イシガイ研究会)・木邑聡美(いであ株式会社大阪支社・イシガイ研究会)・唐澤恒夫(イシガイ研究会)・岡崎一成(イシガイ研究会)・星野利浩(イシガイ研究会)・長安菜穂子(イシガイ研究会)
- P-04 新潟沖砂質浅海域におけるバカガイ個体群崩壊前後の貝類群集の比較  
高田宜武<sup>○</sup>(日水研)・石本綾子(新潟水海研)・岡地恵介(新潟水海研)・長谷川和範(国立科博)・芳賀拓真(豊橋博)・林 育夫(熊野生物研)
- P-05 日本海溝下部漸深底帯及び深海底帯より得られた多板類  
齋藤 寛<sup>○</sup>(国立科学博物館動物研究部)
- P-06 侵略的外来生物ムラサキガイの糞の形態的特徴に伴う沈降速度の変化  
秋山吉寛<sup>○</sup>・井芹絵里奈・岡田知也(国総研 沿岸海洋・防災研究部)
- P-07 コメガカサガイ属の分子系統と生物地理学的研究  
中野智之<sup>○</sup>(京大・瀬戸臨海実験所)・佐々木猛智(東京大学総合研究博物館)・加瀬友喜(国立科学博物館)
- P-08 巻貝に付着するコガモガイ類とその生活史  
中山 凌<sup>○</sup>(京大・理学研究科)・中野智之(京大・瀬戸臨海実験所)・遊佐陽一(奈良女大・理学部)
- P-09 軟体動物における共通する貝殻タンパク質の解析  
宮本裕史<sup>○</sup>(近畿大・生物理工)
- P-10 宇多川河口周辺での津波によるヨシ原消失が貝類に与えた変化  
北村 陸<sup>○</sup>・大越建嗣(東邦大院・理)
- P-11 東京湾におけるサキグロタマツメタの分布と生活史特性  
江口暢次朗<sup>○</sup>・大越健嗣(東邦大院・理)
- P-12 土砂の一時的被覆が伊豆大島の潮間帯生物に与えた影響  
今井元海<sup>○</sup>・大越健嗣(東邦大院・理)
- P-13 日本海とその周辺海域の漸深海帯性大型イトカケガイ科  
長谷川和範<sup>○</sup>(国立科学博物館)
- P-14 日本産イシガイ類6種の塩分耐性  
伊藤寿茂<sup>○</sup>(新江ノ島水族館)・柿野 亘・落合博之(北里大学)・北野 忠・河野裕美(東海大学)
- P-15 貝を用いた視覚障がい者向け講座の実践例  
黒住耐二<sup>○</sup>(千葉中央博)・桜井政太郎・川又若菜(視覚障がい者のための手でのみる博物館)
- P-16 フィリピン・ビサヤ地域の市場で得た貝類  
瀬尾友樹<sup>○</sup>(近畿大・院・農)・ジン・タナンゴナン(近畿大・農)
- P-17 北海道産二枚貝数種に関する報告  
栗原康裕<sup>○</sup>(道総研網走水産試験所)

北海道の海洋深層水汲取り施設から汲み上げられる貝類

P-18 川南拓丸<sup>○</sup>(岩内町地場産業センター)・野別貴博(公益財団法人知床財団)・山崎友資(蘭越町貝の館)

P-19 北海道西岸域と津軽海峡東岸における岩礁潮間帯貝類

山崎友資<sup>○</sup>(蘭越町貝の館)・渡邊修一(国立研究開発法人海洋研究開発機構むつ研究所)

岐阜県大垣市のペルム紀赤坂石灰岩から産する *Shikamaia akasakaensis* Ozaki の形態復元

P-20 安里開士<sup>○</sup>(筑波大院・生命環境科学)・加瀬友喜(国立科学博物館)・小野輝雄(岐阜県瑞穂市)・指田勝男(筑波大・生命環境科学)・上松佐知子(筑波大・生命環境科学)

高水温環境下におけるカワシンジュガイの生育状況

P-21 黒田沙織<sup>○</sup>・伊藤健吾(岐阜大学応用生物科学研究科)・岸大弼(岐阜県水産研究所)・近藤美麻(大阪府立環農水研水生生物センター)・秋山吉寛(国土技術政策総合研究所沿岸海洋・防災研究部)・近藤高貴(大阪教育大学自然研究講座)

エチレングリコールを用いたハダカカメガイのバックルコーン観察法

P-22 桑原尚司<sup>○</sup>(北海道立オホーツク流水科学センター)・山崎友資(蘭越町貝の館)

## 口頭発表について

・1 講演あたりの発表時間は、質疑を含め 15 分（1 鈴 10 分、2 鈴 12 分、3 鈴 15 分終了）です。時間厳守をお願いします。

・会場では Windows7 (PowerPoint2013) のマシンを用意します。OS 等の環境が異なる方は各自で再生テストを行っておいて下さい。**スライドサイズは 4:3 と 16:9 (ワイド画面) に対応しています。**

・データは USB メモリ、または CD-R 等にコピーして当日ご持参ください。ファイル名は「0-01\_Tanaka.pptx」のように「講演番号、アンダーバー、講演者名(拡張子)」(すべて半角英数字)としてください。事前に必ずウイルスチェックを行ってください。

・発表データは受付時にスタッフにお渡しください。23 日の発表は 23 日午前 11 時 00 分までに、24 日の発表は 24 日午前 08 時 15 分までにお持ちください。この時間に間に合わない場合は事務局まで事前にお知らせください。発表後、パソコンにコピーされたデータは消去します。

## ポスター発表について

・ポスターを貼り付けるパネルは幅 90cm×高さ 180cm です。パネルへは画鋏止めになります。画鋏はこちらで用意します。

・**発表用のポスターは発表当日の正午までにポスター会場に掲示してください。**ポスターの展示位置は会場入口から向かって右側にあります（右図参照）。

## 喫煙について

・大会会場入口を出て、向かって左側に喫煙場所があります。喫煙時間は、午前 8 時から午後 5 時となっています。時間外は施錠しているため入れません。

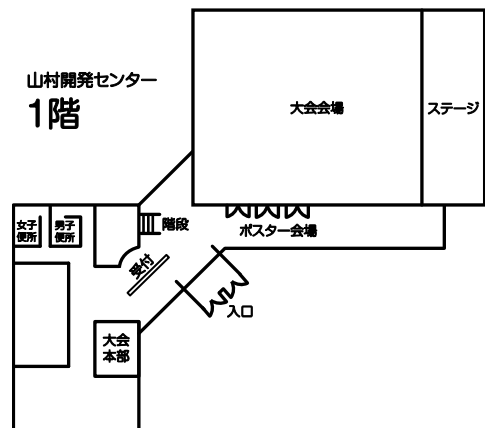
## 大会参加費について

・事前入金がお済みでない方は、受付で大会参加費等をお支払いください。当日の大会参加費は一般 3,500 円、学生 1,500 円です。早期割引（各 500 円割引）は適応されませんのでご了承ください。

・事前入金の方は郵便局でお渡しした振替払込受領証をもって領収証とします。費目を分ける必要があるなど、経理処理上の理由で別様式の領収証が必要な方は事務局までお知らせください。

## 懇親会について

大会会場から約 700 m の町民センターにて、午後 6 時 30 分から午後 8 時 30 分まで開催します。当日参加は一般 4,500 円、学生 3,500 円となります。懇親会終了後、各宿泊施設へバス送迎いたします。**当日参加でバス送迎の申込みをしていない方は、当日、スタッフまでその旨をお知らせください。**また、各地の地酒の持ち寄りを歓迎します。当日受付でお預け下さい。



大会会場見取り図。※休憩室・クロックは 2 階になります。

## 昼食について

- ・弁当を予約された方には受付時に昼食引換券をお渡ししますので、各日昼食時間に、会場1階の受付前でお引き換えください。弁当の予約は締め切りました。
- ・会場から徒歩圏内にコンビニ、街の茶屋などがあります。

## 新千歳空港から会場へのバス送迎について

バス送迎を希望された方は、新千歳空港出口から向かって左側の7番乗場に集合願います。出発時間は午後3時に予定していますが、飛行機の着時間に合わせて出発しますので、多少遅れることをご了承願います。

## 参加キャンセルに伴う返金について

参加費を事前入金されたあとで大会への参加をキャンセルされる場合は、以下の基準で返金いたします。

### ●大会参加費

入金された参加費から、講演要旨集、要旨集送料、及び返金振込手数料として1,000円を差し引いた額を返金します。

### ●懇親会費・弁当代

5月18日(月)までにキャンセルをお申し出頂いた場合は全額返金いたします。5月19日(火)以降のキャンセルについて返金はいたしません(発注等の都合によるためです)ので何とぞご了解下さい。

- ・返金は銀行振込で行いますので、キャンセルのお申し出の際振込先の<銀行名・支店名・口座種別・口座番号・口座名義>をお知らせください。
- ・返金処理は原則として大会終了後に行います。
- ・講演要旨集は大会終了後にお申し込み時のご住所宛てにお送ります。

## 駐車場について

大会会場隣の蘭越町役場の駐車場をご利用ください。使用料は無料で、約100台駐車可能です。駐車場

でのトラブルは責任を負いかねますので、この点について、ご了承のうえ、利用願います。

## 会場(蘭越町山村開発センター)へのアクセス

会場: 蘭越町山村開発センター

〒048-1301 北海道磯谷郡蘭越町258

電話: 0136-57-5286

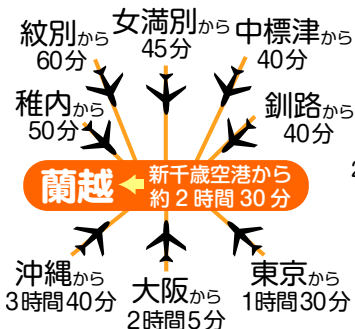
最寄り駅: JR 蘭越駅

駅出口から約700m、徒歩約9分

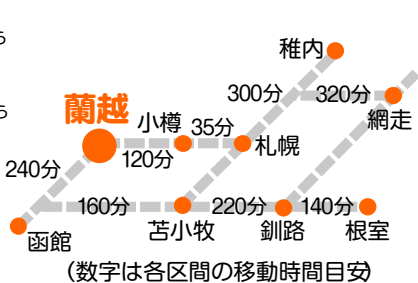


JR 蘭越駅から大会会場までの地図 (googlemap より)

### 空路をご利用の場合



### JRをご利用の場合



蘭越町までの経路

### 陸路をご利用の場合



# 公開講演会

## 漁業の優等生、 ホタテガイ—その生態から資源管理まで—

ごしませいじ  
五嶋聖治（北海道大学大学院水産科学研究院 特任教授）

北海道だけで毎年 40 万トンも漁獲されているホタテガイ。40 万トンというと、北海道での漁獲量では断トツの第 1 位ですが、日本で漁獲されている魚種の中でもほぼ第 1 位です。これには食べられない貝殻の重さも含まれていますので、可食部では半分ほどに減りますが、可食部だけでも日本で上位に入る種類と言えます。この漁獲量を支えるのにまったくの天然のホタテガイだけでは無理で、人の手による管理を行うことによって実現されているのです。いわば漁業における農業化です。今日は日本漁業の優等生と言えるホタテガイが、どのようにして 40 万トンもの漁獲量が可能となったのか、そのサクセスストーリーをわかりやすく紹介します。

長い間、北海道では年に 1 万トン程度の漁獲量でしたが、1970 年代にホタテガイの子ども（稚貝）を大量に確保する技術開発に成功しました。稚貝を海底にまいて（放流）数年間放っておいて大きく成長してから漁獲するという手法が確立することによって、右肩上がりの漁獲量増大が実現したのです。稚貝の確保が可能となったことが、現在の 40 万トンもの大量漁獲の一番の理由です。この稚貝のことを農業にならって「種苗」と呼びます。ただ、畑に種をまいて種苗をつくる農業とは異なり、自然のホタテガイが産み出す子どもを捕まえて、人が管理してある程度の大きさに成長させてから放流種苗とします。つまり、タネをまくことはせず、苗を海から採ってくる点が農業とは異なります。

輪採制と呼ばれる独特の海底利用法と育て方も大

量生産に役立っています。ホタテガイが育つのに適した海をいくつかの区域に区切ります。毎年そのひとつの区域に 1 歳まで育てたホタテガイをまいていくのです。翌年はまた別の区域にまき、それを順々に繰り返して、ホタテガイがちょうど良い大きさ（ふつう放流 3 年後、12cm ほど）に成長した区域を網で漁獲（収穫）するのです。それを順々に繰り返すことから輪採制と呼ばれるのです。いわば海の畑です。農業でふつうに行われている方法を漁業に採用したことが、現在の大量生産に結びついたので

す。この講演では、ホタテガイがどんな暮らしぶりをしてしているのか、その生態や、日本漁業の優等生となるまでに発展したホタテガイ漁業の現状と将来、そして聞いてちょっと得するホタテガイの豆知識について話題提供します。



オホーツク海で水揚げされるホタテガイ（撮影：五嶋聖治）